

所信表明

二〇二五年度学園振興委員長選挙所信表明

学園振興委員長区分の立候補者は二名です（定数一名）

学園振興委員長候補①

理工学部 二回生

堀 友世偉（ほり ゆうせい）

この度2025年度学園振興委員長に立候補いたしました、理工学部2回生の堀友世偉です。本所信表明では

①これまでの活動

②現状の課題

③方向性と施策

について述べていきます。

①これまでの活動

私は昔から好んで人と交流する性格で身の回りの人とより良い生活環境を共有したいと考えていました。そうした思いから中学・高校では生徒会長を務め、学校行事の運営から校則の改正などに取り組みました。手続きを重んじ、安定した生徒会運営を行いつつ、今までにない発想で幅広く学生のためになるような施策を実行してきました。

本学入学後は理工学部自治会で委員長を務め、自治会が学生にとって身近な存在になるようインスタグラムの開設やフォトコンテストを実施しました。また五者懇談会ではアンケート結果をもとに建設的な議論を行い、自治会員と学部長の双方から評価されたと自負しております。学園振興委員会にも所属し、シャトルバス課題に関する懇談会では学園振興委員会の意見を取りまとめました。この懇談会を通して全学議論を担う責任の大きさを再認識するとともに全学議論の奥深さに魅了されました。戦略企画室では学友会公式のインスタグラム運営を行い、学友会全体の広報に携わりました。

②現状の課題

少しだけ近年の全学議論を振り返ります。2023年度には学友会活動の六本柱であった「要求実現運動」は「学園共創活動」へと名称を変更しました。従来の、ただ学生の要求を大学に突きつける形でなく、学生の思いを乗せるのは前提に大学側の事情も踏まえ学園を共に作っていく姿勢は同年の代表者会議で大学側から高く評価されました。そしてこの学園共創活動の考え方に基づき、学生部や教学部、財務部との各種懇談会をはじめ、特定の課題について議論する個別具体的な懇談会の実施が行われてきたところです。

大学側と学友会は長年議論を積み重ねており、その協力関係は年々強化されてきました。しかしながら学年暦の変更やキャンパス間シャトルバスの最終便時刻繰り上げ

など、学生生活に重大な影響を与えるにも関わらず大学側と十分に議論できていないまま実施が決定されてしまった施策もあります。この一つの原因として2023年度の代表者会議で確認された大学側と学友会の協力関係がまだ細部まで行きわたっていないことがあります。具体的には大学側に、学友会は本当に建設的な議論をする準備ができていいのか疑問視されている状況をぬぐい切れていないということです。ゆえに大学側と学友会の信頼関係が不十分であると考えています。

学園振興委員会内部の課題として議論力が十分でないことが挙げられます。全学議論に対して各委員が同じレベルで議論を行うことができたか、学友会としての統一見解を深く理解できているかということを見つめなおす必要があります。

また全学議論については学友会の他の活動に対して情報公開が少ないと考えています。これは未決定の情報を取り扱う関係上、一定理解できるものです。しかし全学アンケートで得た結果をはじめとする学生の意見がどのように議論され、反映されているのか見えないことは学園振興委員会、学友会内部のブラックボックス化を招き、学生との信頼関係をより深く構築していく上での妨げとなります。

③方向性と施策

方向性

こうした中で私が目指すのは、大学側と学生により信頼される学園振興委員会、学

友会です。そこでより具体的な2つの方向性を示します。

1. 議論力の高度化

2. 全学議論における情報発信の活発化

施策

a. 勉強会の実施

b. 学友会の過年度資料の貸し出し

c. 全学議論の情報公開

a. 勉強会の実施

学友会は長年にわたり大学側と議論を行ってきました。その議論内容を追うことは今後の学友会活動の道しるべになるだけでなく、現状の課題解決に向けて新たな視点を加えることができます。また今までの学友会では、良い議論を行うにはどのような準備を行えばよいか、そもそもどのようなものが良い議論なのかということは個人の能力や裁量に任せられてきました。しかしながら安定して継続的に議論を行っていくためには主体性を持ったメンバーが一定程度の議論力を共有しておく必要があります。また勉強会を通して部署間の連携を強化し、情報共有の積極化を図ります。

このように過年度の議論を学習したり、議論の方法について共有したりする勉強会を実施することによって上記課題を解決しつつ、学園振興委員会、学友会の議論力の高度化につなげたいと考えています。

9. 学友会の過年度資料の貸し出し

過年度資料の重要性についてはこれまで指摘されていますが改めて示すと、大きくは課題に対する視点を増やすとともに過去の課題に対する解決策を抽出することで、現在の課題解決にもつながるというところです。では重要性は確認されているにも関わらず、衣笠では資料の貸し出し制度が整備されていないのはなぜでしょうか。それは整理する資料の数が膨大で学園振興委員会ですべての資料を確認できていないからです。そこで来年度は資料に優先順位を振り、整理できたものから順次貸し出しするという方向性で、必ず本施策を実施します。

このように過年度資料の貸し出しを実現させ、学園振興委員会、学友会の議論力の高度化につなげたいと考えています。

9. 全学議論の情報公開

全学議論の情報発信が少ないことは学生との信頼関係を築く上での課題です。また適切な情報公開は学友会費を支払っている学友会員の知る権利を保障するためにも必要です。そこで全学アンケートの受け止めや全学議論における各課題の学友会としての立場、懇談会を経て学生の意見が反映されたことを発信し、学生に開示されるべき情報を共有するだけでなく、学友会に対する興味や信頼を得ることが重要だと考えています。

このように適切な情報公開により学友会活動に対する学生の興味と信頼を強固なものにし、その定着を図ります。

上記の施策をもって方向性で述べた大学側と学生により信頼される学園振興委員会、学友会を達成し、現状の課題を解決します。

最後に

信頼は1日、1週間、大きい組織の場合には1年かけても得ることができないものでありますが、その信頼を勝ち得る唯一の方法は誠実さを長年かけて積み重ねることに他ならないと考えます。非常に地味で長い道のりですが、それを積み重ねることにより、より多くの仲間が過ごしやすい環境を築いていけると確信しています。派手さはありませんが、より良い学友会、立命館大学を創っていけるよう誠心誠意取り組みます。どうぞ、よろしくお願いいたします。

次のページより二人目の候補者による所信表明を掲載しています。
併せてご確認ください。

学園振興委員長候補②

産業社会学部 二回生

吉村 康介（よしむら こうすけ）

このたび学園振興委員長に立候補いたしました、産業社会学部現代社会学科メディアア社会専攻二回生 吉村康介と申します。正課では、主に社会思想史などに関する研究を行っております。

本所信表明では、立候補に至った経緯・動機、それと密接に係る現在の立命館大学内の自治活動が抱える諸問題を指摘しつつ、あるべき活動方針を示していきたいと思えます。

私は以前から自治運動に関心を持っておりました。本学の学内自治活動にも強く興味を持っており、学内の各種活動を注視してきました。そして、学生生活を送るなかで、私自身を含め実際に多くの学生が大学に対し様々な不満や要望をもっており、自治活動の必要性が高まっていることを感じてきました。それと同時に、現実にはそれが適正に解決せず、大学自治が機能不全にあるということも、身に染みて感じてきました。そうした中で、学生の声がより直接的に大学へ届き、大学がより柔軟に学生の要望に対応するよう、自ら主体的に活動したいと考え、二回生の春期には産業社会学部自治会への入会を希望しました。自治会へ連絡したのち自治会室へ招いていただき、各種規定の説明や自治会の実際の取り組み等をお聞きし、入会の決意をかためました。しかしながらその後、約半年間にわたって連絡は来ず、入会が認められること

はありませんでした。このような対応の原因は一体何なのでしょうか。仮に原因が自治会内での人材が不足しており事務的業務の遂行に滞りをきたしていることに認められるのであれば、むしろ、早急に暫定的にでも入会を認め各種の作業を行わせることが、私一人だけでなくより多数の学生の利益につながるはずであり、合理的であるはずです。私としては、このような対応の背後に、自治会委員による学生の恣意的な選別があるのではないかと感じています。

以上を背景に、自治会ではなく学園振興委員会を通して自治活動に携わることを志しました。

立命館大学は教学理念に「平和と民主主義」をかかげ、憲章にて、自主、民主、公正、公開、非暴力の原則を貫き教職員と学生の参加のもとで大学運営を行うことを謳っています。ここからは当然、学内民主主義を原則とした自治活動が導かれるでしょう。自治会とは、これらの理念を実現するため、学生全体に開かれた民主的な組織として存在するべきであり、それを欠いては自治の実現はありえません。学生を恣意的に選り好みし入会を渋る現在の自治会の姿勢は、本来学生全体に開かれ民主的であるべき自治組織としての理念に反するものであり、非常に重大な問題を持っているというべきです。私は、昨今の学内での自治意識の低下は、こうした学友会内部での閉鎖的体質が必然的に招いたもののではないかと考えます。こうした体質が改善されない限り、学生が主体的に自治を担っていくことは不可能です。

また、私は学内の自治組織である「リガク」に参加しており、学生の意見をまとめて要望書として大学・学友会に提出する活動に携わってきました。その中の学友会の対応にもまた、以上で指摘したものと同等の閉鎖性を節々に感じます。要望書への返答は非常に遅く、内容に関しても「検討事項として受け取る」といったような機械的な回答がなされ、具体的な展望については何一つ示されません。学友会のHPには「想いをカタチに」を活動理念とすると謳われています。要望書にまとめられた学生の声は「想い」ではないのでしょうか。このように、学生の切実な要求を切り捨て、恣意的な基準で運営を行う学友会の姿勢は、活動理念と明らかに矛盾しています。このような状態では、広く学生の声を聞き入れ大学の民主的・開放的な運営を行うことは不可能です。

以上、学部自治会への入会ができず自治会での活動が行えないことを背景に、これと緊密に結びついた学友会の閉鎖的体質の抜本的変革を行う目指し、このたび学園振興委員長に立候補した次第です。

投開票日 二〇二四年一月二日

二〇二四年度立命館大学学友会中央選挙管理委員会